

第 188 回ユネスコサロン

第 188 回ユネスコサロンは、広島大学名誉教授岩崎文人さんを講師に迎え演題「被爆 80 年 文学に描かれた 8 月 6 日」として開催されました。

最初に原爆について描かれた文学、手記、絵画、映画、写真、漫画と作者を紹介され、続いて戦後すぐ布かれた民間検閲支隊の検閲の項目では当時の社会情勢として表現に制限があり、その中でどのように被爆当時のことが表現されていたかを話されました。作者が大切と思う箇所多くが削除され意味のない作品になったこと、平和への願いを表現しただけで人間の基本的自由を失ったこと、印象深かった作品は栗原貞子の『黒い卵』の「戦争とは何か」でした。戦場において人間はこうも激しく変身するものかと形の無い心の変化の恐ろしさを感じました。

ジョン・ハーシー『ヒロシマ』、原民喜『夏の花』で紹介されたどこにでもある平凡な日常が一撃の原子爆弾によって地獄と化す風景・情景となりそれを歴史の証明として書き留めた作者の気概を感じた時、全ての人が追い求めている“平和”の到来のため何をすべきか考えさせられた。

「被爆 80 年」という節目を迎え、幼少期にあった被爆者の体験の記憶も薄れつつあり、原爆投下時刻も不確かな小中学生が増えたという。世界に目を向ければロシアのウクライナ侵攻、中東の衝突など深刻さを増している現在、紹介された作品は平和を追求し、被爆体験を継承する役割を課せられた広島市民にとって大きな意味を持っていると思いました。

文化部会長 高田幸子

